情をもつて親切に誘導しなければならぬ。

奇妙な動植物（つゞき）

田寺寛二

前號に於きましては生存競爭といふ事を極手短かにお話しましたが、斯う云ひますと世の中は實に悲雲慘膽たるもので、命が縮まる樣な氣がしますが、左樣ばかりでもありませぬ、又互に扶けあひ、共に一致團結して相親むといふ温かな潮流も流れて居るのであります。

此温かな潮流と云ふのは、所謂共同生活とか共生とか云ふものでありまして、全く種類が違つて居る動物（植物にも共生といふがありますが其は植物のお話をする時に述べませう）が、共に生活を營みまして、お互に繁榮を謀るのであります。

前號で已にお約束申しました通り、此度は昆虫のお話をする筈なのですから、此共生といふ事も昆虫の中から材料を採りませう。（「からす貝」と「たなご魚」との共生なども隨分面白いですから、御研究になるのもいゝでせう）

茲でお話しやうと思ふのは、蟻と蚜虫との共生であります。この蟻はクマアリと申しまして、蚜虫はミドリアブラムシといふのであります。

此二つが何んな方法で共生するかと申しますとクマアリは常にミドリアブラムシが棲んで居る近くの枝を往復します。アブラムシといふのは植物の嫩葉を食ふ害虫でありますが、蟻は樹枝を往復してをるとき、此蚜虫を害するテントウムシとかクサカゲロウ（何れも幼虫のときから盛に蚜虫を捕食するものです）を追つて、まことに大切に保

護するのです。

是れは何故かと申しますと、ミドリアブラムシは腹部から一種の甘い液体を分泌しまして、クマアリに與へるからであります。此甘液は往々樹の上に積みまして、樹下に滴るとがあります、昔甘露が降るといつたのは此事であります。

さて蟻は何んな方法で、此甘い液を蚜虫から取るかと申しますと、蟻が枝から枝へ移つて行くときに、其頭の處にある觸角を以て、蚜虫の腹部にある二本の細い管に觸れて、其腹部の末端にある肛門から分泌る無色透明の甘い液を舐めるのであります。然し他の物が此細い管に觸れても、蚜虫は少しも其甘液を出すことはないです、だから丁度蟻と蚜虫とは何か特約でも結んである樣です、斯樣に蟻は蚜虫からいゝものを貰いますから、害虫を追拂つたり、地上に落ちてる蚜虫を樹上に運んだり、或は蚜虫が居る樹の枝に其食物がなくなると、之を他の枝へ移したりして其繁殖を謀るです、だから樹木を栽培する人は、蚜虫が發生して居ることを發見したら、直ぐ殺してしまはなければなりませぬ。

此クマアリとミドリアブラムシとが共生して居る有樣は、丁度吾々が牛を飼うて其乳を得るのと能く似てゐるでせう。

已に此例によつてお了解になつたでせうが、此世の中も生存競爭といふ樣な怖ろしい戰爭の外にまた共生といふ樣なよい親密な所があるといふことは明かでせう。